

遺跡の概要

舟場向川久保(2)遺跡は、東北新幹線七戸十和田駅から北東約4.2kmの地点にあり、小川原湖に注ぐ坪川の中流域、標高約16～18mの台地縁辺に立地し、昨年度青森県埋蔵文化財調査センターで発掘調査を実施した猪ノ鼻(1)遺跡と沢を挟んで南側に隣接しています。約3ヶ月間調査を行い、竪穴建物跡1棟、土坑墓9基、落とし穴55基、土器埋設遺構1基、円形周溝1条などを確認し、弥生時代の土器片や管玉等段ボール箱で約6箱分の遺物が出土しました。

遺構の概要

- ・竪穴建物跡…1棟確認しました。1辺が約3mの方形を呈しています。遺物があり出土せず、カマドの遺存状態も悪いことから、詳細は不明ですが、堆積土中に十和田a火山灰、白頭山－苦小牧火山灰が層状に堆積していることから、10世紀前葉以前に帰属すると考えられます。また、床面の中央で地床炉が確認され、その上面からは炭化材が出土しています。
- ・土坑墓…長軸が約1m前後の楕円形あるいは隅丸方形を呈し、底面が平坦になるものを土坑墓と認定し、本遺跡では9基確認しました。第13号土坑(SK13)など7基は底面に溝を巡らせていました。堆積土中からは、時期を特定できるような遺物はほとんど出土していませんが、第13号土坑からは管玉が130点出土しています。今後堆積土中の炭化物による放射性炭素年代測定等を実施し、時期等を検討していく予定です。
- ・落とし穴…直径が約1.5m程度の円形あるいは楕円形を呈し、底面にピットが付属するものを落とし穴と認定し、合計で55基確認しました（ただし、底面にピットが付属しなくても、規模や堆積土の状況から本分類として認定したものも含まれます）。これらは調査区の台地縁辺に整然と並んでいます。底面に付属するピットは逆茂木痕と考えられ、中央付近に1基あるもののほかに、小さなピットが複数あるものも確認されています。
- ・土器埋設遺構…1基確認しました。底面が穿孔された弥生時代前期後葉～中期前葉の壺形土器が正位で埋設されていました。内部からは骨片等は出土していません。
- ・円形周溝…長軸が約4m程度の馬蹄形を呈します。主体部が確認されず、遺物も土師器の細片が少量出土しているだけで、詳細は不明ですが、古代以降に帰属すると考えられます。

遺物の概要

弥生時代の土器や後北C2・D式土器、土師器、石器類などが出土しています。また、第13号土坑からは130点の細型管玉が出土しています。全ての長軸方向に径1mm程度の穿孔がなされており、強い規格性が感じられます。また、石材は全て碧玉製

と考えられます。今後石材の同定や製作技法の復原等、様々な分析を実施する予定です。

遺跡の特徴

本遺跡は縄文時代には狩猟場として利用されていたことがわかりました。55基もの落とし穴が整然と並んで確認された例は青森県内ではこれまで類例が無く、当時の狩猟のあり方を考える上で大変貴重な事例と言えます。

また、土坑墓が9基確認され、うち1基から管玉が多量に出土したことも非常に注目されます。130点以上の管玉が出土した例は、青森県内では外ヶ浜町^{うてつ}宇鉄遺跡に次ぐ事例となりました。
(濱松 優介)



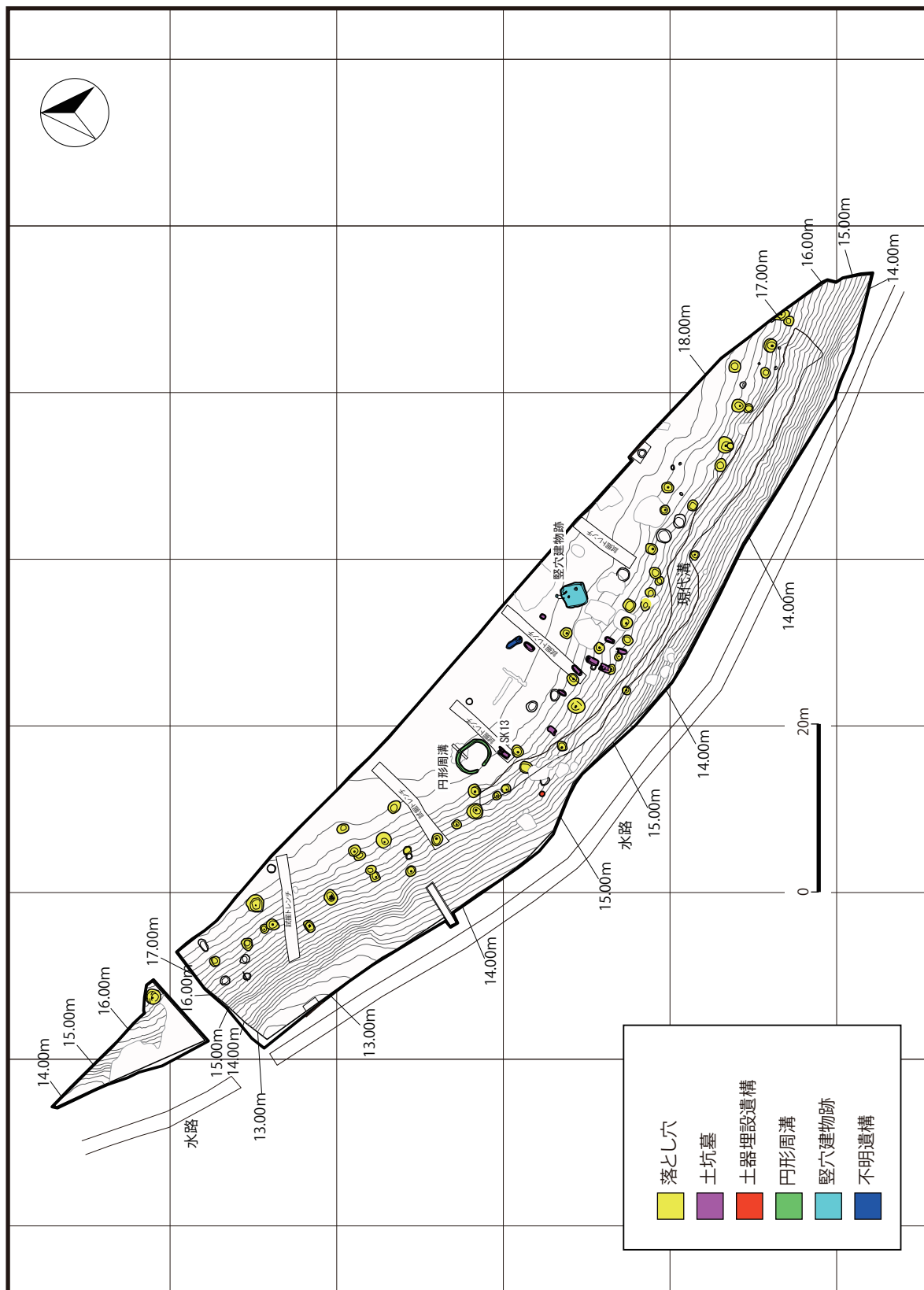
遺跡全景（南から）



土器埋設遺構 土器出土状況



第13号土坑 管玉出土状況



舟場向川久保（２）遺跡 遺構配置図